

Title	在日華人の文化変容に関する心理学的研究：個人の文化的アイデンティティにおける“Nativism”を中心に
Author(s)	邱, 蔡小瑛
Citation	大阪大学, 1996, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/40106">https://hdl.handle.net/11094/40106</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉</a> 大阪大学の博士論文について <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">〈/a〉</a> をご参照ください。

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	邱 蔡 小 瑛
博士の専攻分野の名称	博士 (人間科学)
学位記番号	第 12673 号
学位授与年月日	平成 8 年 9 月 19 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科 教育学専攻
学位論文名	在日華人の文化変容に関する心理学的研究 一個人の文化的アイデンティティにおける“Nativism”を中心に—
論文審査委員	(主査) 教授 三木 善彦 (副査) 教授 白樫三四郎 教授 春日 直樹

## 論文内容の要旨

1980年代以来、外国人の文化的適応問題を解決するための異文化学習理論はかなり注目され、支配的であった。しかし、その理論は筆者による実証的研究の結果により、必ずしも支持されないことがわかった。つまりそれは少なくとも在日外国人においては適用しない側面が見られたからである。よって本研究では個人の文化変容に関する心理学的研究を続ける必要性を指摘したい。そこで、在日華人（台湾人を中心とする中華文化圏出身の人々）を例として、個人の文化変容に関する心理学的考察を行うことにした。その目的を遂行するにあたって筆者はこれまで先行研究が見過ぎてきた華人の文化的アイデンティティを儒教文化圏の枠組みでとらえることにした。本研究は個人の文化変容を説明するキーワードとして“Nativism”を導入した。“Nativism”という言葉は、従来人類学の分野で「土着主義」と訳して使われてきた。しかし、在日外国人の心理的適応を解明するという理由で、ここでは、「外国人の滞在国に対する防衛的自文化優越感」として定義する。一方、本研究が対象とした外国人の“Nativism”という概念はあらゆる文化の共通性 (etic) と出身文化の固有性 (emic) という二側面から見るができる。つまり、“Nativism”は外国人の文化的アイデンティティと関連するという共通性があるが、華人の文化的固有性である「家」に対する特殊な感情とつながっている。したがって、“Nativism”が本研究は華人の家族主義による個人の文化変容に与える影響を考慮し、それを一つの概念的な枠組みとして取り扱いたい。

筆者は、台湾や中国、香港など中華文化圏の人々からなるグループ（以下華人と呼ぶ）と、アメリカ人、ヨーロッパ人及び華人以外の発展途上国の人々の適応態度を比較した。それによれば、華人グループは、周りに対する防衛的自文化優越感が最も強く見られた。そのため筆者は文化変容における“Nativism”の現象に関心を持ち、さらに台湾人を中心とする在日華人を対象にして、調査を行った。その結果“Nativism”は文化変容的過程によって生じるものであり、外国人の文化的アイデンティティと深く関わっているという仮説を持ち、本研究は以下の3点を解明することを目的としたものである。

- (1) 在日華人の心理的文化変容を“Nativism”という要素に焦点をあて、長期滞在者の文化的アイデンティティを明らかにしたい。

(2) 在日華人の自文化に対する強いアイデンティティは彼らの日本社会を受容する意志に与える影響を明らかにしたい。

(3) 在日華人が自文化から引き受けた元の社会的アイデンティティは彼らの生き方意識に与える影響を明らかにしたい。それに際して、従来の心理的文化変容に関する諸研究における文化的普遍性を検討したい。

なお、本論文は第I部の理論編の第2章では心理的文化変容に関する先行諸研究を整理し適応の困難点を述べる。さらに、在日華人の“Nativism”を理解するため、第3章では在日華人の心理的文化変容の特殊性を指摘した。また、本研究の調査方法の選択根拠に関してもこの章に述べる。

第II部の実証編では、大きく分けて3つの方法によって調査を行った結果を示した。第4章は(調査1)質問紙法によって、在日華人の個人の文化的アイデンティティの因子構造を明らかにするものであり、“Nativism”の心理的文化変容への影響を示したものである。第5章は(調査2)参与的観察法により、“Nativism”の形成を異国という特定の状況のもとでの「家」及び「面子」という概念を用いて明らかにしたものであり、第6章では(調査3)面接法によって、“Nativism”を「親孝行」及び「面子」への要求という視点をとらえようとした。

第III部の総括編では、まず第7章において文化変容の一般性、華人の特殊性及び土着心理学的なアプローチという三つの流れにより、本論文の内容を要約した。そして、従来の心理的文化変容に関する研究における二つの立場について論じ、つづいて本研究の限界についても検討した。それに加えて、本研究の結果を実践的に意味づけるため、研究結果に基づいて日本人中国帰国者(残留邦人)の心境を推測した。次に第8章では、特に「面子」及び「家」を重んずる儒教文化圏において、人間としての存在価値を、ミクロ及びマクロな視点の両方取入れながら探究し、異文化間における相互理解への展望を述べた。

本研究は在日華人の文化的アイデンティティの在り方をとらえることを目的とした。emicな視点によって長期滞在者に焦点をあて、質的調査及び量的調査の両方を展開することによりその目的はほぼ達成されたと言えよう。まず在日華人262名を対象にし、質問紙法により儒教文化圏における個人の文化的アイデンティティに関して、「家」の文化的特質に注目しながら調査を行った。その結果、「家」を背負った在日華人の文化的アイデンティティについて、「『家』を背負った義務的自己」、「華人共栄圏における自尊意識」、「個人的志向・自己本位的自己」及び「出身元への帰属意識」という四因子を導出した。この四因子は、彼らの心理的文化変容と解釈しうる。“Nativism”は、必ずしも従来の心理的文化変容に関する諸研究が主張しているように適応の否定的な要因としてしか存在しないわけではない。適応者の自己概念における主体性及び彼らの適応意志においては、それが肯定的な要因になる。

“Nativism”という態度もしくはそれに類する行為は文化的普遍性から言えば、外国人の適応を阻害することもあるが、彼らの文化的アイデンティティが破壊されそうな危機に直面したときは、元来の自己像を保護することによって、自己受容を助け、自己を再統合する役割を果たすという機能をもつことが明らかになった。また、在日華人の場合、「家」及び「面子」にもとづいた“Nativism”は、彼らの異国に適応しようとする意志及び生きがい意識を意味づける側面をもつ。このように、故郷という共栄圏における自尊意識は、彼らの適応意志に役に立つものとして考えられる。

民族的・文化的同一性の比較的高い日本社会は、一般の外国人にとって適応しにくい国として見られてきた。また、在日外国人は日本人と仲間意識を作りにくいために、外国人同士で集まりやすいと言えそうである。日本に住んでいる華人の“Nativism”は以上の状況によって、さらに強化される可能性も高い。本研究の結果は今後の日華間の相互理解を進めていく上でも、さらに日本社会の国際化にも役に立つと思われる。日本社会は異なる民族・文化を受容することは大切であり、西洋など先進国出身の外国人に対するだけでなく華人や韓国人などの外国人への受容的態度は、むしろ、彼らの“Nativism”を緩和することができるかもしれない。

そして、在日華人の文化的アイデンティティに関し、彼らの家に対する義務的自己に対し、「家」から離脱したいという個人主義的志向は、むしろ前向きな生き方意識及び適応意志を阻害する要因として現れた。これは、従来の儒教倫理においては、自己本位に近いために評価されてこなかった側面であろう。また、外国人が自分の出身元にアイデンティティを求めないという従来の文化変容仮説による分類は再考する必要がある。それはeticなアプローチによるものであるが、特に中華文化圏出身の外国人において不適切であると思われる。

したがって、心理的文化変容における文化的アイデンティティを課題とする研究では、外国人の出身文化における社会的アイデンティティの在り方を考慮するという emic なアプローチを重視すべきであろう。また、心理的文化変容という研究課題のみならず、おそらく儒教文化圏を対象とする他の課題においても、家族主義の存在を中心的に取り扱うべきであろう。

上記の研究結果から、少なくとも儒教文化圏における個人の自尊意識に関する研究は etic なアプローチだけでは十分に捉えられないと考えられ、emic なアプローチによって土着的な概念に固有の主体性を重視することが大切だと思われる。

## 論文審査の結果の要旨

国際化の時代にあって国際交流は頻繁になり、人々は留学や仕事で出身国とは異なる文化をもった外国で暮らすチャンスが増加し、滞在国に対する適応の問題はますます重要になっている。

本論文は日本に長期滞在する華人（台湾人を中心とする中華文化圏出身の人々）を対象として、質問紙法や観察法あるいは面接法によって、彼らが日本社会に心理的に適応する様相を調査研究したものである。

その結果、華人は出身地の文化にもとづくアイデンティティ（家を背負った義務的自己、華人共栄圏における自尊感情、出身元への回帰意識）が、日本社会への適応を促進し、生きがいとなっていることが明らかになった。

邱蔡小瑛さんは7年前に来日し、本学部で研究生、大学院生として文献的研究をすかたわら、在日華人のさまざまな会合に出席して面識を深め、電話相談員や中国からの帰国者の自立相談員及び通訳としても活躍してきた。その経験は調査研究の上で役立ち、在日華人を対象にした本研究に多くの人々の協力を得ることができた。

本審査委員会は本論文を異文化適応（変容）に関するすぐれた論文として評価し、博士（人間科学）の授与に値するものであると判断するものである。邱蔡さんが異文化の中にあって研究に打ち込み、外国語での大部の論文を仕上げた努力を讃え、博士号取得を契機として研究者の道をさらに進み、日華間の相互理解を深める架け橋の一人として活躍することを期待したい。